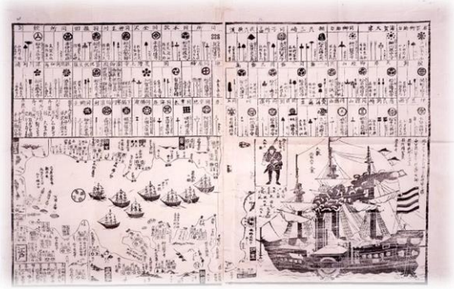
第二部　村を導く

Ⅰ　村役人として

小室家は、医業の傍ら村役人としても村を主導する立場にありました。

三代元長が享和年間(1801～04)に名主後見役に就任して以来、五代元長が文久元年(1861)に退役するまで、三代にわたって名主や名主後見役を務め、その後も村の有力者として領主や幕府役人との関係は続きました。

小室家文書には、村政を担う上で収集した文書や、検地帳なども含まれており、多忙な医療活動を行いながら、村政もおろそかにしなかった小室家の姿を伝えています。



黒船来航の瓦版　［嘉永6年(1853)］

北条氏邦書状　［天正11年(1583)］

Ⅱ　文化人として

小室家の人々は、知識人・文化人としても俳諧・漢詩・郷土研究など多くの分野で活躍しており、著名な学者や文化人との交流もありました。

小室家文書には、数世代にわたって収集された、医学書以外の歴史・地誌・文学・漢籍などの書物のほか、書状・書画など多彩な史料があり、文化史的にも第一級の史料群といえます。

また、小室家の人々自身によって著述・編さんされた研究書・随想・歌集なども多く、文化人としても優れた業績を残したことがわかります。

Ⅲ 好古家として

好古家とは、古美術や有職故実研究なども含めた考古学・歴史学の愛好家のことです。特に幕末から明治時代にかけての好古家達の業績は、現在の考古学・歴史学研究の基礎となっています

小室家五代の元長は好古家としても名高く、晩年は甲山(現熊谷市)の根岸武香らとともに郷土史研究に没頭しました。小室家文書には、元長が収集したと思われる古代・中世文書の原本や写本、金石文の拓本などが含まれています。

また、このような調査の成果を元長自らがまとめた著作もあり、その内容が高く評価されています。

南木廼屋随筆　明治時代

※[　]内の年号は推定です

※期間中に展示替えを行います。全期:全期間　前期:6/9～8/9　後期:8/11～10/11

【発行日:平成27年6月9日　編集・発行:埼玉県立文書館】

彩の国 埼玉県

コーナー展示

小室家文書展

―在村医のまなざし―

上から時計まわりに:小室元長自画像/産科器具/及門姓名録/足羽先生提安藤文澤雪行図

平成27年6月9日(火)～10月11日(日)

休館日：月曜・祝日・月末休館日(6/30･7/31･9/30)

埼玉県立文書館

開催にあたって

昨年（平成26年）度、総数約7,600点にのぼる文書群、「小室家文書」が当館に寄贈されました。これを記念して、「小室家文書展」を開催いたします。

小室家は、江戸時代中期頃から比企郡番匠村（現ときがわ町）に居住し、産科を専門とする蘭方医として地域医療に多大な貢献をしてきました。小室家の医学塾「如達堂」は、日本で最初に帝王切開の手術に成功したことで知られる伊古田純道・岡部均平や、種痘接種の先駆者といわれる安藤文澤をはじめ、多くの門人を輩出しています。

また小室家は、村役人としての重責を担っていたほか、俳諧や書画などを通じた文化人たちとの交流もあり、地域文化を牽引する役割も果たしていました。

今回の展示では、在村医（村医者）・村役人・文化人・好古家といった小室家の様々な表情を紹介するとともに、小室家の史料を通して、近世から近代への移行期における埼玉の実像に迫ろうと試みます。

最後になりましたが、現御当主の小室開弘氏をはじめ、今回の展示に御協力をいただいた関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成27年6月

埼玉県立文書館

第一部　在村医のまなざし

プロローグ－小室家の人々－

小室家の初代、田代元貞は、享保10年(1725）に医師として番匠村に招かれました。その後、三代目の元長は、姓を小室と改めて甲斐国の鶴田斎宮のもとで産科を学び、寛政8年(1796)、賀川流産科術の免許皆伝を受けました。

元長は、文政年間(1818～30)に子の四代元貞とともに医学塾「如達堂」を開き、多くの弟子を育てる傍ら、俳人としても活躍しました。

五代目の元長は、医業の研鑽に努めながら、村役人として幕末～明治維新期を乗り越え、晩年には好古家として歴史研究にも力を注いでいます。

紙本墨画小室元長自画像　［嘉永4年(1851)］

上田長則朱印状　天正2年(1574)

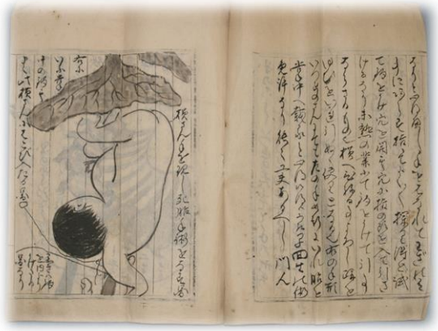
Ⅰ　命へのまなざし－産科医として－

三代元長が修得した賀川流産科術は、医師、賀川玄悦が臨床経験をもとに独学で確立した施術法です。小室家には、免許皆伝の際に鉄鈎（難産の際に母体から胎児を引き出す道具）が授けられました。

出産時の母子死亡率が高く、母体が優先された時代にあって、賀川流は鉗子の発明など、母子ともに救う技術も模索していました。

当時は生活苦などによる堕胎も珍しくありませんでしたが、如達堂ではこれを医道に背く非人道的行為として厳しく戒めています。

このような高い倫理性と人道主義を背景に、如達堂からは日本初の帝王切開術を成功させた伊古田純道らが巣立っていくのです。



如達堂産科奥術秘伝巻　［寛政8年(1796)］

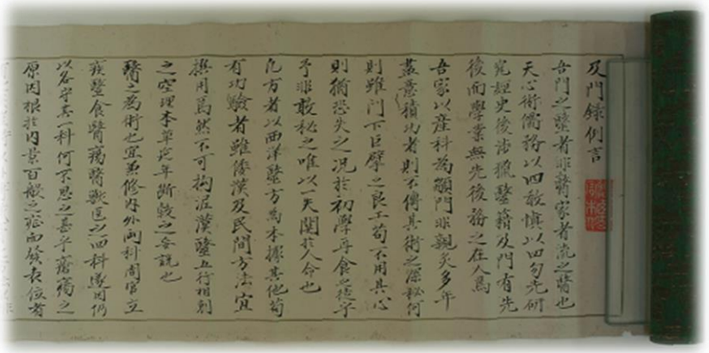
紙本淡彩足羽先生提安藤文澤雪行図
［弘化3年(1846)］

Ⅱ　医学へのまなざし－究め・広め・育む－

江戸時代後期になると、漢方(東洋)医学を基礎としていた日本の医療は、蘭方(西洋)医学を融合した新たな段階へと進み、技術も格段に向上します。医業の修得には、藩校などによるもののほか、江戸や大坂をはじめ、各地に開かれた医学塾での修業などがありました。

如達堂は、小室家の三代元長・四代元貞によって営まれた医学塾で、門人たちは埼玉県北西部を中心とした広い地域から集まっていました。

学問の世界では、一度会得した技術や知識も、常に更新し続ける必要があります。小室家でも、四代元貞が西洋産科学の祖といわれる蘭学者のもとで学ぶなど、新しい知識や技術の導入に余念がなく、また広範囲な医師・蘭学者間の交流を通じて、膨大な量の医学書を入手し、最新の知識や情報を収集することに努めていました。



及門姓名録　［嘉永2年(1849)］

エピローグ－近代の小室家－

明治新政府が樹立されると、衛生行政も政府主導で行われるようになり、医学所が開設され、試験による医師の免許制度も始まりました。

五代元長は、入間県の医学所に出仕しており、六代元貞も種痘接種などの衛生行政に携わっていましたが、明治8年(1875)、元貞は旧師のもとで医学研究を行うためとして医業休業届を熊谷県に提出しました。

その後、元貞は番匠村村会議員、明覚村助役などを経て、明治25年(1892)に明覚村長に就任し、村政を担ったほか、学校の建設や運営など、近代教育の普及と発展にも尽力しています。

常に村にあって、村と、そこに暮らす人々を見つめる小室家の姿勢は、近代以降も変わることはありませんでした。